

中国語を母語とする 上級日本語学習者の語りにおける 名詞の使用について

—日本語母語話者と比較して

烏日哲

◆要旨

本 研究では中国語を母語とする上級日本語学習者と母語話者双方の語りにおける内容を表す実質語である名詞の使用を対照・分析することによって、学習者の語り方の傾向を明らかにすることを試みた。具体的には、中国語を母語とする日本語学習者に字のない絵本を見せ、その内容を日本語母語話者相手に話してもらい、日本語母語話者の談話との比較を行った。その結果、母語話者は事故現場の状況を具体的に外面から描写する傾向があるのに対して、学習者は登場人物である犬に名前をつけたり、ストーリーの内容を伝える前にその解釈を加える傾向があるため、ストーリーの内容そのものと関係性が薄い「物語」「ストーリー」などの語句を好む特徴が明らかになった。

◆キーワード

学習者、母語話者、語り、名詞、描写

◆ABSTRACT

This research is to clarify the tendency in learner's narrative by contrasting and analyzing the use of noun, a kind of content words, which indicates the nature of a story, between advanced Chinese learners of Japanese (hereafter Chinese speakers) and Japanese native speakers (hereafter Japanese speakers). First, I showed a picture book to the Chinese speakers and the Japanese speakers and requested them to tell its content to a hearer who did not know the story. Then, I contrasted the discourses created by the two groups. It is observed that the Japanese speakers had a tendency to describing the scenes objectively, while the Chinese speakers often added their comments to the story before storytelling, by putting a name to the dog, the main character of the story, and so on. It is also clear that the Chinese speakers tends to use the word "story", which does not have a close relationship with the story.

◆KEY WORDS

Learner, Native speaker, Narrative, Noun, Describe

The Use of Nouns in Narrative
by Advanced Chinese Learners
of Japanese
A comparison with native
speakers of Japanese
WURIZHE

1 はじめに

中国語を母語とする上級日本語学習者（以下「学習者」とする）が日本語で一まとまりの発話を行うとき、文法的にも意味的にも適切性が高いにもかかわらず、日本語母語話者（以下、「母語話者」とする）の発話と比較すると「話し方」が違うという印象を受ける。

では、いったいどこがどのように違うのか。本研究では学習者と母語話者の「話し方」の相違を探るため、学習者に字のない絵本を見せ、その内容を母語話者相手に話してもらい、同様の作業をしてもらった母語話者の談話と比較した。そして、学習者と母語話者双方の語りにおける内容を表す実質語^[註1]である名詞の使用を対照・分析することによって、学習者の語り方の傾向を明らかにすることを試みた。

2 先行研究

4コマ漫画あるいは6コマ漫画、アニメーションを調査材料にし、学習者と母語話者の談話を分析したものに、栃木（1989）、田代（1995）、渡邊（1996）、増田（2000）、庄司（2001）、渡辺（2003）などがある。これらの研究は、接続表現、指示表現、視点、語彙選択などの観点から学習者と母語話者の談話を比較分析し、中・上級日本語学習者の文章あるいは会話の特徴を、それぞれ固有の角度から明らかにしたものである。ここでは、語彙選択の観点から学習者と母語話者と学習者の違いを論じたという点で本研究にとって示唆的であった庄司（2001）に触れておきたい。

庄司（2001）は、語彙選択の側面から母語話者と学習者の口頭表現能力を比較したものである。庄司（2001）は、中国人学習者を中心にアジア圏の学生10名と母語話者10名に対して6コマ漫画と一続きの絵を2種類用意し、口頭で話してもらおうという調査方法でデータを集めた。分析方法としては、発話データを動詞、名詞、副詞、連体詞、助動詞、格助詞、接続助詞、副助詞、成句と分けて数を数えた。主に、発話文の長さ、語の選択の質、活用語の出現頻度と文

脈の適切性、結束性の面から考察し、学習者と母語話者の語彙選択について比較した。その結果、母語話者に比べて学習者の発話は文の構成が単純で、1文の長さが比較的短い。動詞と助詞の使用に誤用が多く、既習語の語義を恣意的に拡張して使用する傾向があることがわかったと報告されている。

庄司（2001）は語選択とテキスト全体の適切性を判断する際には母語話者8名以上が使用した語を「必須語」、母語話者5名以上が選択した語を「重要語」と判断し、それを「ストーリー・テリングのためのキーワード」としている。つまり、母語話者の語の選択を基準にして差をつけているのである。

こうした庄司（2001）の手法は、学習者をいかに母語話者に近づけるかという日本語教育の観点から考えると示唆的であるかもしれないが、本研究の目的である学習者と母語話者それぞれの表現的特徴を捉える捉え方にはなじまない。そのため、本研究では母語話者を基準とせず、学習者と母語話者が同じ内容を表す際どのような語彙を選択しているのかをそれぞれ見ていくことにする。

また、庄司（2001）は被調査者の選定として、被調査者である学習者が全員日本語能力試験を受けたものの、全員合格したわけではないとしている。その点も、学習者のレベルを明確にした本稿とは異なる点である。

3 研究の資料と方法

3.1 調査材料

調査に用いた絵本『アンジュール ある犬の物語』は、ベルギーの作家ガブリエル・バンサン¹⁾の鉛筆デッサンによるものである。ある日、犬は飼い主に捨てられるが、飼い主を探しつづけ、最後にある少年と出会うという犬の1日を描いたものである。作品は全部で54枚の絵からなっており、文字による説明は行われていない。

具体的には次のような場面で構成されている。まず1匹の犬が飼い主と思われる何者かによって車の中から捨てられてしまう。捨てられた犬は道で飼い主を待ち続けるが、飼い主の姿は見えない。犬は飼い主を求めてさまよひ始め

る。犬は道を渡ろうとして突然飛び出したため、それを避けようとした車と対向車線の車が衝突し、交通事故になってしまう。そして、犬は事故現場から離れ、野原や海辺のようなところでさまよい続ける。やがて町らしきにぎやかなところに着き、最後にある少年と出会うのである。

絵本を調査材料に選択することには以下のような長所があると考えられる。

- ①文字がなく、絵だけで内容を理解するので、学習者と母語話者にかかる負担は同じである。
- ②ストーリーが展開性を備えており、場面の変化が多いので、物語の内容を噛み砕いて表現する即興的な能力を試すのに適している。
- ③漫画より絵本のほうが文化的背景を異にする人でも容易に理解できる。
- ④漫画のように短くはなく、ストーリーが4コマや6コマで決まっているわけでもないため、より説明力が問われ、被調査者の特徴が出やすくなる。

3.2 調査対象

本研究では、大学の学部在学する学習者20名と母語話者20名に調査を依頼した。学習者は、日本語のレベルを揃えるために、中国の大学で日本語を専攻している、日本語能力試験1級に合格した者に限定した。母語話者の調査協力者は全員都内の大学に在学する社会科学を専攻する学部生である。学習者の言語資料の収集は2006年3月1日から3月11日の間に1回目を、2008年3月11日から3月23日の間に2回目を、中国の某大学構内のホテルの一室で行った。母語話者の言語資料の収集は2006年6月1日から2009年6月30日の間断続的に、日本の某大学の小教室で行った。

3.3 調査の手続き

まず、調査協力者である話し手に絵本を20分程度読んでもらった。読み終わったら、その内容を聞き手に伝えるよう指示し、聞き手はまだ絵本を読んでいないことを伝えた。調査は話し手と聞き手が机を挟んで対面に位置し、1対1で行った。その全過程を調査者が2台のビデオカメラで録画した。調査時間

は1人当たり約30分である。

今回の調査の聞き手は、話し手全員と初対面である母語話者3名である。3名とも都内の大学院に在学中の20代前半の女性である。また、聞き手による干渉をできるだけ避けるため、聞き手には調査が終了するまで絵本の内容を見せずに、質問を最小限にし、質問がある場合はできるだけ同じ質問をするように指示した。実際の調査においては、聞き手3名ともあいづちは打っていたが、話し手の発話に対して、発話を中断して質問をすることがなかったため、談話のデータは聞き手の違いによる干渉はなかったと思われる。

3.4 分析方法

本研究は主にストーリーの内容を直接表す名詞の使用を比較することによって、学習者と母語話者が絵本の内容をそれぞれどのように捉え、どのような情報をどのような表現を用いて表しているのかについて考察することを目的とする。

4 結果と分析

本研究では、学習者と母語話者の語りにおいて、ストーリーの内容を直接表す名詞的表現がどのように用いられているのかについて使用した人数を算出し、それぞれの使用の傾向を探る。

まず、表1でわかるように、登場人物について見ると、「犬」、「車」は学習者、母語話者それぞれ20名全員に用いられているが、学習者のうち6名が「犬」に名前をつけている。それに対して母語話者の犬に対する呼び方のバリエーションが比較的少なく、2名以外ほとんど「犬」で通している。

また、母語話者が犬の飼い主のことを「飼い主」と呼ぶのに対して、学習者のうち15名が「ご主人」「主人」「主」という言い方で飼い主のことを表現している。一方、母語話者にはこのような呼び方は2名にしか見られなかった。

母語話者は事故を起こした車について、一貫して「車」と再現しているが、学習者は「車」以外に「運転者」が4名、「運転手」が7名いた。これはおそらく母語話者と学習者のそれぞれの視点の違いを表しているのではないかと考えられる。

表1 日本語学習者と日本語母語話者の登場人物における名詞的表現^[註2]

| カテゴリ | 具体的な表現 | CJ | JJ |
|---------|--------|----|----|
| 犬について | 犬 | 20 | 20 |
| | 飼い犬 | 4 | 1 |
| | 野良犬 | 1 | 4 |
| | ワンちゃん | 1 | 0 |
| | エンジェル | 1 | 0 |
| | ハチ公 | 1 | 0 |
| | しんちゃん | 1 | 0 |
| | ワンワン | 0 | 1 |
| | アンジュール | 2 | 1 |
| | 放浪者 | 1 | 0 |
| 飼い主について | 飼い主 | 6 | 10 |
| | ご主人 | 3 | 1 |
| | 主 | 3 | 0 |
| | 主人 | 9 | 1 |
| 車について | 車 | 20 | 20 |
| | 運転手 | 7 | 0 |
| | 運転者 | 4 | 0 |

表1以外の登場人物には、学習者と母語話者に以下のものが登場している。

- ①妻 (CJ1, JJ0)^[註3] 夫婦 (CJ1, JJ0) 家族 (CJ3, JJ3)
- ②影 (CJ2, JJ1) 人影 (CJ3, JJ5) 恋人 (CJ3, JJ0)
- ③おじさん (CJ4, JJ3) おじちゃん (CJ1, JJ0) 男性 (CJ0, JJ1) 知り合い (CJ1, JJ0)
- ④女の子 (CJ1, JJ3) 男の子 (CJ4, JJ5) 子ども (CJ7, JJ4) 少年 (CJ0, JJ5)
トム (CJ0, JJ1)

上記はストーリーの人物の登場順で並べたものである。①、③、④は絵本において人物がしっかり確認できるのに対して、②は交通事故が起きたあと、犬がほかの場所へ移動する途中で見えた光景である。絵本の中にははっきり描かれておらず、薄黒い影にしか見えない。それを母語話者は「影」「人影」と忠実に描写しているのに対して、学習者のうち3名が「恋人」と断定している。

例1 それで、海のところへ、あの一、海のところへ行きました。うーん、海辺に、あの一恋人がさん、散歩している恋人を見ました。(CJ-12)^[註4]

例2 それで、まあ、その後も、その辺うろろ放浪していると、人影が遠くに見えたので、もしかしたら飼い主かもしれないと思って、近づいてみるんですけど、なんか違う。(JJ-11)

絵本の最後の出会いのシーンでは、④で示したように、学習者と母語話者がそれぞれ「女の子」「男の子」「子ども」とストーリーの結末に出てくる子どものことを描写しているが、母語話者は5名が「少年」という名詞を使用しているのに対して、学習者では1名も使用していなかった。

例3 希望を持たないまま歩いて、急に、ある子どもが、あわれ、あわれ、現れました。その子どももじっくりとその犬を見ていました。(CJ-17)

例4 そこには、一人の少年がいました。その少年はこの犬がやったことも、どういう犬かもしらなかつたけれど、「こっちおいで」とやさしく言ってくれました。犬は最初は疑っていましたが、その少年の笑顔とかに引かれて、近づいてしまいました。(JJ-17)

さらに、学習者は語りの際、6名が犬に名前をつけるていたが、母語話者は2名だけだった。

例5 えーと、昔エンジェルと言う名前の犬がいました。(CJ-2)

例6 えー、ワンちゃんがその車をずっと追いかけて、あきらめ、諦めませでした。(CJ-14)

例7 この絵本の、このストーリーの名前は、えー、恩を返す犬、というものだ。というものです。犬の名前はハチ公です。(CJ-19)

以上では登場人物に焦点を当て、どのような名詞を用いて登場人物を指し示しているのかを考察したが、以下では、ストーリーの展開そのものと関係が薄い絵本自体についての紹介あるいは説明的な語句にどのような名詞的表現が用

いられているのかについて見てみたい。こうした語句は絵本に対する説明であるため、語りの開始部と終結部に現れる表現である。

- ⑤物語 (CJ11, JJ3) 話 (CJ3, JJ8) 絵本 (CJ6, JJ0) 本 (CJ1, JJ3) ストーリー (CJ4, JJ0) ラブストーリー (CJ0, JJ1) 映画 (CJ2, JJ0)
- ⑥作者 (CJ2, JJ0) テーマ (CJ1, JJ0) 題名 (CJ0, JJ1) 場面 (CJ1, JJ3) シーン (CJ0, JJ2) 内容 (CJ0, JJ2) 理由 (CJ0, JJ1) マス (CJ0, JJ1) 結末 (CJ1, JJ0) ハッピーエンド (CJ0, JJ2)
- ⑦皆さん (CJ1, JJ0) 読者 (CJ1, JJ0)

例8 今日は、あ、野良猫、野良犬、ごめんなさい、が、飼い犬になった、そのこと、物語を話した、たいと思います。(CJ-6)

例9 うーん、この絵本の、このストーリーの名前は、えー、恩を返す犬、というものだ。というものです。(CJ-19)

例8、9のように、学習者は語りの冒頭部で絵本の説明を加える傾向があった。鳥(2011)は、中国語を母語とする上級学習者(CJ)と母語話者(JJ)が絵本の説明を行うときに現れる語り方の特徴を比較分析し、それぞれの「語り」の特徴を明らかにした。そこで、母語話者は絵本に描かれている事実を忠実に再現するのに対し、中国語を母語とする学習者は「語り」の冒頭部と終結部において話し手の感想やコメントを加える「評価」をよく用いる傾向があると指摘している。そのため、⑤のような「物語、話、絵本、ストーリー」などの名詞的表現が用いられたのである。⑤では、母語話者のうち8名が「話」を使用した。語りの終結部に物語の締めくくりとして、「という+話」が用いられたためである。学習者にはそのような表現は見られなかった。

例10 そして犬は、自分を受け入れてくれる人に出会って、うれしそうにまあ、近寄って行って、子どもと、えー、子どもと仲良くして、なっついて終わりという話です。(JJ-15)

例11 そうですね。これはかなり悲しい物語だと思います。えーと、この犬

は飼い主を、捨てられてしまいました。(CJ-9)

一方、⑥で示したように、母語話者は絵本を語る際、「これは絵本の一場面である」ということを強調するかのように、「マス、シーン、内容」のような語句を用いる。これは母語話者がストーリーを再現する際に、物語に入り込むことなく、常に外側から客観的に、淡々と語るからではないかと考えられる。これについて、鳥(2010)では、母語話者は絵本をもとに語る際にできるだけ場面を忠実に再現し、ストーリーの展開と場面描写で客観的に外面から捉える傾向があると分析している。

例12 えーと、最初に、最初の場面というのは、えーと、車が一台、えーとおそらく砂漠を、にやってきて、そ、そこ、その道、そこですね、飼い主らしき人がですね、犬を捨てるというシーンです。(JJ-20)

例13 で、その最終のマスでは、違う町にたどり着いて、路地裏でちょっとゴミをあさったりして、町の人に追い払われたりして、ちょっと惨めな、になったりするんですが、そこで、町のはずれで、あの一、一人の子どもに出会うんです。(JJ-10)

次では、ストーリーの展開に焦点を当て、学習者と母語話者は実際の物語の場面をどのような語句で表現し、どこに注目して語っているのかについて考察する。以下は交通事故の場面を語る際に用いられた名詞的表現の使用者数である。

学習者と母語話者に共に用いられたものには、

- ⑧スピード (CJ6, JJ2) 方向 (CJ6, JJ2) 現場 (CJ2, JJ3) 状況 (CJ6, JJ1) 交通渋滞 (CJ2, JJ1) 渋滞 (CJ1, JJ1) 急ブレーキ (CJ1, JJ3) ハンドル (CJ1, JJ2) 道路 (CJ6, JJ6) 道端 (CJ3, JJ2) 道 (CJ8, JJ13) 途中 (CJ2, JJ3) 事故 (CJ6, JJ13)

などがある。

一方、母語話者の発話にはあって、学習者の発話には現れなかった表現は以下の通りである。

- ⑨対向車 (CJ0, JJ1) 車道 (CJ0, JJ1) 端 (CJ0, JJ1) 玉突き事故 (CJ0, JJ2) プレーキ (CJ0, JJ1) タイヤ (CJ0, JJ1) 火の手 (CJ0, JJ2) 場 (CJ0, JJ2) 惨事 (CJ0, JJ1) けが人 (CJ0, JJ1) 救急車 (CJ0, JJ2) 逆方向 (CJ0, JJ1) 煙 (CJ0, JJ1) 正面衝突 (CJ0, JJ1) 至近距離 (CJ0, JJ1) 大火災 (CJ0, JJ1) 火災 (CJ0, JJ1) 炎 (CJ0, JJ1) 反対側 (CJ0, JJ1)

⑨から分かるように、母語話者は実際何が起きたのか、事故の現場を丁寧に外面から描写している傾向がある。ここで注目すべき単語は「場」である。学習者は使用者がいなかったのに対し、母語話者は7名が使用していた。実はこれは全て「その場」という使い方で用いられているのである。具体的にどのような用いられているのか、例を示す。

例14 まあ、犬も申し訳なく思っていました。そして、その一、まあ、犬はその場からちょっと逃げるようにして、えー、その、この道路、捨てられた道路から離れていくんですが、 (JJ-9)

例15 で、犬はこれはまずいなと思って、見てたら、どんだん事故がえらい大事故になっていて、で、これはどう、どうしたものかと思って、とりあえずその場を逃げ去るわけです。 (JJ-10)

例16 この犬は最初はやってやったっていう感じでその場から離れるんですけど、ちょっとその場から離れてみると、すごい炎やすごい人、警察などがたくさん来て、大惨事になってました。 (JJ-13)

このような表現は学習者には見られなかった。では、学習者は交通事故の場面でどのような表現を使用しているのか。以下は、学習者の発話にはあったが、母語話者の発話には見られなかった表現である。

- ⑩交通事故 (CJ3, JJ0) 追突事故 (CJ1, JJ0) 自動車事故 (CJ1, JJ0) 高速道

- 路 (CJ3, JJ0) 事件 (CJ3, JJ0) 犯罪者 (CJ1, JJ0) プレーキ (CJ2, JJ0) 怪我 (CJ2, JJ0) 体 (CJ1, JJ0) 傷 (CJ1, JJ0) 行動 (CJ1, JJ0) 儀式 (CJ1, JJ0) 流れ (CJ1, JJ0) 速度 (CJ1, JJ0)

⑨と⑩を比較すると、⑨の母語話者が事故現場の状況を具体的に外面から描写しているのに対して、⑩の学習者の表現には事故と関係ない表現も入っており、母語話者に比べ、ストーリーの展開が多様であることがわかる。これは、語りの内容を豊かにする反面、わかりにくさにもつながる要因の1つだと考えられる。

5 まとめと今後の課題

本研究では、学習者の語りの語彙選択に焦点を当て、学習者と母語話者の語りにおける名詞の使用の特徴を探ることを目的にした。その結果、母語話者は事故現場の状況を具体的に外面から描写する傾向があるのに対し、学習者は登場人物である犬に名前をつけたり、ストーリーの内容を伝える前にその解釈をする傾向があるため、ストーリーの内容そのものと関係性が薄い「物語」「ストーリー」などの語句を好む特徴が明らかになった。

今回は学習者の語りを分析するにあたり、名詞のみに焦点を当てたが、今後は動詞や形容詞などの他の実質語も含め、機能語などの表現的特徴を全体的に捉えることに努めたい。

〈一橋大学大学院博士研究員〉

注

[注1] …… 本研究でいう「実質語」は、文の構成要素の中の主に内容的な意味を表す要素であり、主に名詞、動詞、形容詞、副詞が含まれる。それに対するのは、機能語、すなわち、助詞、助動詞、形式名詞、接続表現などの文型を構成する要素である。

[注2] …… 「CJ」は中国語を母語とする日本語学習者を、「JJ」は日本語母語話者を示す。数字は使用者数である。被調査者の学習者と母語話者は共に20名である。

[注3] …… () の中のCJ、JJの後に付く数字は使用者数を表す。

[注4] …… 例文末の「CJ-12」のような表記の「-」の後に付く数字は、被調査者番号を表す。

参考文献

- 烏日哲 (2010) 「中国人日本語学習者と日本語母語話者の語りにおける説明と描写について—「絵本との一致度」の観点から」『日本語教育』145, pp.1-11. 日本語教育学会
- 烏日哲 (2011) 「中国語を母語とする日本語学習者の「語り」の冒頭部と終結部における表現的特徴—日本語母語話者と比較して」『一橋大学留学生センター紀要』14, pp.23-35. 一橋大学留学生センター
- 庄司恵雄 (2001) 「日本語学習者のストーリー・テリングは語彙選択から見て日本語母語話者とどこが違うか」『群馬大学留学生センター論集』1, pp.1-11. 群馬大学留学生センター
- 田代ひとみ (1995) 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点」『日本語教育』85, pp.25-37. 日本語教育学会
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉20例』スリーエネットワーク
- 栃木由香 (1989) 「日本語学習者のストーリーテリングに関する一分析・話の展開と接続形式を中心に」『日本語教育論集』5, pp.159-174. 筑波大学留学生教育センター
- 増田真理子 (2000) 「日本語学習者と母語話者のストーリーテリング文を比較する—4コマ漫画のストーリー内容を書いたテキストの分析から」『多摩留学生センター教育研究論集』2, pp.13-25. 東京農工大学留学生センター・電気通信大学留学生センター
- 渡邊亜子 (1996) 『中・上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版
- 渡辺文生 (2003) 『日本語学習者と母語話者の語りの談話における指示表現使用についての研究』(平成13-14年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)研究成果報告書))